
紙飛行機

シャオレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紙飛行機

【Nコード】

N1275Q

【作者名】

シャオレイ

【あらすじ】

卒業式の日。式が終わり、人気のない教室に僕たちはいた。終わってしまった日々と、これからの日々に思いを馳せて。

（前書き）

以前学校の文芸コンクールで落ちた物があったので、投稿しようと思いました。処女作ですので到らない部分やおかしい部分もあるとおもいますが、ご了承ください。

カサカサという紙の擦れる音がする。

ふと振り返ると、そこには一心に紙飛行機を折る明穂の姿があった。

彼女の傍らには、まだ折られていない折り紙の束と、同じように様々な色で折られた紙飛行機の山が出来ている。

彼女は出来上がったその具合を確かめると、机の上の山に積む。そしてまた一枚の折り紙を手に取り、同じ手順で折っていく。ひたすらにその繰り返しだ。

「……………何？」

どうやら僕が見ていたことに気がついたようで、視線は折り紙に向けながら声だけをこちらに放った。

「いいや。ただ、明穂はよくそんな作業を延々と続けられるな、と思うて」

「いいじゃない。面白いのよ？ 綾人もやってみれば？」

「僕は遠慮しとくよ……………」

僕は少しの呆れと批難を込めた声で明穂に返事をしたが、どうやら僕の声は完全に無視するつもりらしい。

一旦手を止めて僕の方を向き、それから僕の前にある机の上に視線を移した。

「そういう綾人だって何か書いてるじゃない」

僕の手元には、文字がびっしりと書き込まれた原稿用紙の束が置いてある。左手に持っているシャープペンをくるくると回した。

「これは明穂を待っている間の暇つぶし。明穂が帰る気になれば、僕はすぐに帰れるの」

その言葉で会話を終えると、明穂は再び紙飛行機を折りだした。

僕も原稿用紙に向き直り、続きを書く。

カリカリ。カサカサ。

しばらくの間、この二つの音だけが教室を支配していた。

やがて短編の小説を書き終えた僕は、立ち上がって窓を開けた。春の温かい空気が教室の中に入り込んでくる。

突然吹きこんだ強風に折り紙が飛びそうになるが、明穂はそれを手で押さえ、僕に無言で視線だけを送ってきた。

吊り上がった目は、窓を開けたことに対する怒りを物語っていた。

「ごめん、と僕が一言謝ると気が済んだのか、紙飛行機を折る作業へと戻った。」

夕陽が校舎に反射して、その眩しさに目を細める。

最上階の窓から眺めた校庭には小さく見える生徒の姿がちらほらと見えた。

僕と明穂の鞆の上には卒業証書が載っていた。校庭を歩いている彼らも僕らと同じ卒業生だろう。

卒業式。僕たちにとって最後の行事。

式の最中、涙を流す子たちもいた。けれど、僕は泣けなかった。

学園生活の終わりというモノがよくわからなかったからだ。

それでも、この茜色に染まった光景を見ると、何かが終わったような、そんな感覚が僕の心に芽生えていた。

僕は窓から離れ、二つの鞆のうち僕の物を取ると、中から卒業アルバムを取り出す。

席に座ると、机の上で散乱していた原稿用紙を纏め、それを机の上に広げた。

明穂の紙を折る音を背景にして、掲載された写真たちを見ていく。

三年間の間に取られた写真は僕の埋まっていた記憶を掘り出し、その思い出を鮮明に写しだした。

その中には僕と明穂が映っていたものもあった。親が親友同士だったころもあり、ずっと一緒だった仲だ。明穂とのこと思い出して、

つい口元が綻ぶ。

不意に、これかも明穂と一緒にいられるのだろうか？ という思いが浮かんた。

もしかしたら、これで終わってしまうのではないか。

卒業式の最中には思いもしなかったそれが、僕の思考を支配する。

そんな悪循環にはまってしまっていると、ふと頭をコツンと叩かれた。

思考が中断され、頭を叩いた張本人を見つめる。

「また、綾人の悪い癖が出てる」

明穂は軽く握っていた拳を解くと、掌を僕の頭に載せた。

昔から、姉のようにふるまっていた明穂の癖だ。幼いころからずっとやられ続けていたが、未だに慣れない。

だが、振りはらっても無駄なことは分かっているので、気恥ずかしさで若干無愛想な返事をした。

「僕の癖ってなにさ」

「考え込むと、周りが見えなくなるような癖。ついでに音もね。…何を悩んでたの？」

流石に幼馴染には隠し事は出来なかった。このまま黙っていても

厳しい追及の上で、答えさせられてしまっただろう。

わざわざそんな徒労に終わるような選択肢を取るような僕じゃない。

「……こんな日々が、終わってしまうんじゃないかって、思ってた。……素直に告白した。」

明穂は呆れるでも怒るでもなく、僕の頭に載せた手を離し、机の上の紙飛行機の山から一つを手にとった。

それは、夕焼けと同じような赤い色をしていた。

明穂は窓を開くと、こっちに来いと僕を手招いた。

明穂の隣につくと、彼女の手元を覗き込む。そこでは、明穂が紙飛行機に微妙な調整を加えていた。

満足したかと思えば、それを目線の高さまで上げ、片目を瞑って全体のバランスを見てから、それをまた直す。

その作業を二、三回繰り返すと、ようやく調整が終わったのか、投擲の姿勢に入る。

そして、

「……っ！」

紙飛行機を放り投げた。

投げられた紙飛行機は、空に向かって一直線に飛んでいった。

夕陽と同じ色をしたそれはまるで、夕陽に溶けていくように飛んでいく。その光景はとても綺麗で、僕は思わず見入っていた。

しかし、ただ折られただけの紙がいつまでも飛ぶはずもなく、途中で減速し、高度を徐々に落としていった。

そして、紙飛行機は校庭に落ちた。

落ちた機体の行方を見届けると、明穂はまた違ったモノを持ってきた。

最初の紙飛行機と同じように調整を加えると、またそれを空へと放った。

二機目は風に流され、一機目とはまた別の場所に降り立った。

しばらくの間、明穂が紙飛行機を取り、調整しては校庭に向かって投げる、を繰り返した。

すると、突然明穂がポツリと呟いた。

「……私たちもさ、出るときは同じところだけど、最後に行きつくところは全然違うところなのかな。この紙飛行機たちみたいに」

そう呟いて紙飛行機を投げる彼女の横顔は、何を考えているのか、僕には読みとれなかった。

それからどれほどの時間が経っただろうか。

既に机の上に積み上げられた山は無く、数枚の折り紙が置かれただけになっている。

明穂が最後の一つの調整を終えた。

最後の一機。明穂は、それを空の彼方へと投げた。

風に上手い具合に乗ったのだろう。紙飛行機はぐんぐんと高度を上げ、校庭の敷地を超え、そしてついには見えなくなった。

僕たちは黙りこくって、見えなくなった紙飛行機の行き先を見つめていた。

急に、明穂が踵を返して机の上を片付け始めた。

「帰るわよ、早く支度しなさい」

あまりに唐突な発言に、呆けてしまう。

「……なにボケっとしてんの？」

「あ、ああ分かった」

僕は急いで机の上に広げたままだった卒業アルバムを閉じ原稿用紙を纏めると、鞆に仕舞った。

明穂はといえば、準備はすでに終わっていて、教室の入り口で待っていた。

僕は窓を閉め、忘れ物がないかどうか確認すると、教室から出た。教室から出た瞬間、いつもとは違う感覚に、一瞬足を止めた。

誰もいない。まるで穏やかな湖面のような静寂がこの校舎を包んでいた。

コッ。

僕が呆けていると、明穂は歩き出していた。しかし、明穂が行くうとしているのは階段とは違う方向だ。

慌ててその後を追うと、隣に並んだ。

「なあ、どこに行くつもりだ？」

「別に」

それだけ言つと口を閉じた。

二つの足音だけが廊下に響く。音がそれだけのせいで、余計に大きく聞こえる。

僕たちは無言でただ歩き続けた。そうして歩いていると、明穂が歩みをピタリと止めた。

「どうしたんだ？」

「部室、寄っていいこうと思って」

明穂が部室の扉を開けて、中に入っていた。

部室の中には、無数の本が置かれていた。

文芸部。それが、僕と明穂の所属していた部活だ。

本棚にぎっしりと敷き詰められたその中には、僕たちが発刊した雑誌もある。

僕はその中の一冊を手に取り、ぱらぱらとページをめくった。

そこで、ちょうど明穂の名前が目にとまった。

明穂の書いた小説。最初の文化祭の時に明穂が書いていたものだ。そのときの文化祭を思い出しながら、読んでいく。

明穂の書いたそれは、童話だった。

明穂は童話が好きだった。読む本も、書く本もそうだったものが多かった。

この雑誌に書かれた内容も、心が温かくなるような内容だった。みんなは明穂のイメージとは違うというけれど、僕は明穂にぴったりの小説だと思った。

僕が小説を読み進め、そろそろ終わるところで、明穂に持っていた本を取り上げられた。

「……なに読んでんのよ」

「いや、明穂の小説」

「読んじゃだめ」

「なんでさ？」

「……恥ずかしい」

「なんで今さら。そんなこといったら、文化祭の時に多くの人が持っていてもらったのはどうなの？」

「それはいいのよ。目の前で読まれるのは、恥ずかしい」

それだけ言うと、明穂は雑誌を本棚のスペースに戻した。

また読もうとしてもどうせ明穂に捕まるだろうから、読むのは諦める。

「ここも、今日でお別れなのよね」

明穂がしみじみとそう言った。

「……そうだね。まあ、後輩たちが上手くやってくれるさ」

今の一年生の部員だけで発刊した同人誌を見つめながら言う。

そうだ、と思いつき、さっきまで書いていた小説を取りだした。

原稿用紙の右上に穴を開け、そこに紐を通す。紐を結び、取れなくなったことを確認すると、原稿用紙の上に題名を書いて、本棚の端に加えた。

「どうしたの？」

「ん？ いや、ちょっと先輩からのささやかなプレゼントというか……」

「自分の書いた小説をプレゼントねえ……。よし」

明穂は何かを思いついたように、僕の鞆から原稿用紙を一枚取り出し、ペンを走らせた。

十分くらいで明穂がペンを置き、原稿用紙を二つに折った。そしてそれを僕の小説を入れたすぐ横に差し込む。

どうやら詩を書いていたらしい。

「どんなものを書いたの？」

と僕が聞いても、

「内緒」

としか答えてくれなかった。

その後、部室を出た僕らは、ぶらぶらと校内を歩きまわった。

他の教室を見てまわり、音楽室や美術室といった場所を訪ねて行

った。

歩きながら、取りとめもないことを話し続けた。

そんなことをしているうちに、いつの間にか僕たちは昇降口についていた。

上履きを下駄箱に入れそうになり、慌てて鞆の中に入れる。

皮靴を取りだし、履き替える。

僕と同じタイミングで履き替え終わった明穂と顔を合わせ、思わずくすりと笑う。

昇降口を出た僕たちを迎えたのは、大きな夕陽だった。

「ねえ、明穂」

「なに？」

「夕陽ってね、田舎よりも都会の方が赤く見えるんだよ」

「なんで？」

「都会の空気に浮かんでいるチリとか埃に光が反射してすごく赤く見える……だった気がする」

「ふうん」

夏休みにお盆で田舎に帰って見た夕陽よりも確実に赤い夕陽は、

校舎を、校庭を、町を染めていた。

「さて、紙飛行機を回収しましょう」

僕が夕陽に見惚れていると、急に明穂がそんなことを言いだした

「回収……？」

「そう、流石にポイ捨てはまずいでしょ？」

明穂は、校庭の端に落ちていた紙飛行機に向かって歩き出した。

やれやれと歩きだし、明穂とは反対方向の紙飛行機を拾いに行った。

紙飛行機はいろんな場所に落ちていた。それによって、校庭には色とりどりの点がポツポツと出来上がっていた。それは、まるで夜空に光る星のようだった。

明穂の方を見ると、黙々と紙飛行機を拾っていた。

こんな面倒なことをするんだったら、飛ばさなければよかったのに、と呟いた。

「なにー！」

校庭の反対側にいるはずの明穂から言葉が飛んでくる。

まさか、僕の独り言が聞こえたのか？　だとしたら地獄耳じゃないか……。

と、今度は口に出さずに心の中で呟いた。

「なんでもない！ それより残りどれくらいだ？」

「あと少し！」

それを聞くと、僕も飛行機の回収に戻った。

視界にあるのは、後四機。全て拾うと、結構かさばった。

仕方なく鞆の中に入れると、明穂の元に走る。

「どうだ？」

「うん……、一応見つけたのは拾ったけど。後、二機足りない」

「校庭の外に飛んでいったんじゃないか？」

「……そうかも」

明穂は持っていた紙飛行機を自分の鞆に入れると、制服の汚れをはたき、僕に向き直った。

「それじゃ、行こうか」

そうして、僕と明穂はまた並んで歩きだす。

もしかしたら、こうやって並んで歩くことはなくなるのかもしれない。

なんてことを考える。

昔からずっと、そばにいた。それが僕と明穂の関係だ。

明穂が隣にいない、ということは、考えることは出来なかった。

「なあ、明穂」

「なに？ 綾人」

いつもと同じようなやりとり。だけど、僕の心はいつもとは違っていた。

「もしもさ、僕たちが……」

とそこまで言っていると、明穂が急に走り出した。

「ちょっと！ 明穂！」

僕もその後を追って、校門へと走る。

追いついた僕が見たものは、明穂の笑顔だった。

「見て、綾人！」

そう言って明穂が指差す先にあったのは、寄りそうように落ちていた二機の紙飛行機だった。

「……綾人はさ、さっき、こんな日々が終わっちゃうかもしれない

って言ったでしょ？」

「……うん」

視線はひたすら紙飛行機に向けたまま答える。

「きっとね、教室から投げた紙飛行機みたく、みんな、いろんなところに行く。でも」

明穂は紙飛行機を拾い上げると、その片方を僕に渡した。

「この二つみたく、終わらずに一緒にいることもできると思うんだ」

「……うん」

僕の口からは、もうその一言しか出なかった。

僕たちは顔を見合わせると、笑った。

ずいぶん長い間、僕たちは笑っていた。

さつきまでぐるぐると廻っていた思いは、もうどこかへ行ってしまった。

「行こう、綾人」

明穂の差し出した手を握る。

僕たちは、確かに将来の行き先は違うかもしれない。

でも、この紙飛行機たちのように、いつまでも一緒にいたいと思う。

僕と明穂は顔を見合わせると、手を繋いでいない方の手で紙飛行機を構えた。

そして、

「せーの！」

同時に紙飛行機を空に放つ。

空に放たれた紙飛行機は、いつまでも寄りそって空の彼方へと消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1275q/>

紙飛行機

2011年1月16日06時43分発行